

アメリカにおける野外教育・ 野外レクリエーションの現状

ウィリアム・E・ニーポス*

(田中祥子訳)

私自身、日本の野外教育の現状とか、日本における野外教育のカリキュラムに関心があり、今日は講演というよりは、皆様のお話を伺いたいと思っています。でも、まずは私なりに把握している米国における野外教育の現場における実情と、最近の傾向などについて一時間ほどお話しして、あとのディスカッションを長くしたいと思っています。

私はまだあまり日本の事情に明るくないのですが、今まで読んだ文献とか、自分の観察を通じて感じていることは、やはり余暇行動自体とりあげてみると、アメリカと日本とでは、あまり変わっていないような気がします。

私からのお願いですが、私も話している最中でも、そうは思わないというような御意見がございましたらすぐ、その場で、おっしゃって下さい。

一般的にいえることですが、1960年代、1970年代には多種多様な余暇活動がアメリカでは試されました。多分日本でも同じことではないかと思われます。それ以後、経済的発展が止まり、レクリエーション活動への参加度も減少しました。そして、現在、1980年代に入って大体安定した参加者数になってきたようです。レクリエーション活動の一口にいても、余暇にする活動は何でも入ってしまいますから、多種多様であるし、その参加度についても人によって違います。

もっとも頻度の多い余暇活動といえば、やはりお金をかけず短時間でできるというものが多くのように思えます。具体的にいえば、テレビを見るとか、友人を訪問する、散歩をするなど、手間がかからずできることです。皆に人気のある余暇活動ですが、その頻度からいうと、ずっと少ないものの中に、例えば、観光旅行とかキャンプが入ってきます。一般的によく行なわれ

る余暇活動ですが回数からいえば1年に1度か、2度ということではないかと思えます。その他のレクリエーション活動として、やる人は熱狂的にやるが、活動に参加する人口はずっと少ないというものに、スキー、水上スキー、など、大変お金も時間もかかるものがあります。その点、日本も同じパターンのような気がします。

米国における自由時間について少々お話ししましょう。米国では一般に大体40時間一週間に働きます。それより短い人も勿論いますが、医者・弁護士とか、自分で時間の調整のつく人の中では、それより長時間働いている人も少なくありません。つまり一般的傾向として、ブルーカラーの人の仕事時間はどちらかという短縮されてきているので、そのような人達の中で二つの仕事を持っている人もいなくありません。特に郵便屋さんにもその例を多く見ます。

休日のことについていえば、米国では皆様御存知のように土・日は休みになっています。その上国民の祝祭日、例えばワシントンの誕生日とかリンカーン誕生日が土・日になった場合に金曜日に振替休日をとることになっています。休暇も仕事に関係なく誰でも2週間は続けてとれます。時には2、3カ月一度に休暇をとれる会社も稀にはあります。

停年はいまは65才だったものが70才になっています。しかし早く停年になって自分の自由時間を十分に楽しみたいという傾向が見られるような気がします。

アメリカでは余暇産業が大きな仕事になっています。これも、どこまで、何をもち余暇活動とするかという定義がはっきりしないので、どこまでを余暇消費とするかも問題ですが、テレビの修繕まで入れると相手の額のお金が動いています。

* William E. Niepoth, ph.D., Professor, Dept. of Leisure & Recreation Studies, University of California at Chico.

余暇活動、自由時間に関与している団体を大きく分けて、だいたい3つになります。1つは官庁や州政府市町村によってなされる公共レクリエーション、それから利潤を目的としないYMCAとかYWCAのような民間団体によるレクリエーション、そして商業レクリエーションです。公共レクリエーションに関しては余暇関係の予算が削られる傾向になります。それによって公共レクリエーション関係の仕事も減ってきている訳です。反対に商業レクリエーションの方法が増大してきています。内容的にはどうかと見てみますと個人の成長、つまり自己改善、自分がよりよき者になることに深くかかわったレクリエーション活動が増えてきています。日本でも同じ様ですが、フィットネスとかジョギングが大変流行しています。私の住んでいるカリフォルニア州のサクラメントの近くにあるチコでは人口4万人の小さな町ですが、その中のフィットネス・センターが3カ所もあります。重量上げとか、エアロビックスも、とても盛んです。

自己開発的プログラムが大変盛んだと申しあげましたが、学位をとることなどが目的でなく、自分の楽しみで色々なものを学習している人が多くなってきています。またストレス解消のために、ヨガとか、メディテーションつまり冥想だとかも盛んになってきています。また身体の調子がよくなればストレスもなくなるという考えから栄養学を勉強する人などプログラムが増えていきます。

また増化してきているものとして身障者のプログラムがあげられるでしょう。決して新しく、初められたものではありませんが、身障者のキャンプに強調が置かれています。それと同時に高齢者のレクリエーションも大変増えています。ジョギングを楽しんでいる高齢者の姿をよくみかけます。

公共レクリエーション・プログラムの場合、最近の傾向としてお金を支払って参加するプログラムが増えています。勿論、予算がカットされたというのが大きな原因ですが、大人対象のプログラムの場合、安かろう、悪かろうの考え方もあるので、ある程度はお金をとった方がよいという意見もあります。勿論子供対象のプログラムは無料を原則とし、水泳場を使用するとかいう場合は安い費用をとることもあります。

皆が好んでする余暇活動にジョギングやフィットネスがあるとお話ししましたが、その他テニスも盛んですが、ここ7、8年、ラケット・ボールというのが盛ん

になってきています。民間団体のレクリエーションとして、このラケット・ボールが盛んになってきています。

スキーやアルペンスキーも相変わらず人気のあるプログラムですが、最近では歩くスキー、クロスカントリーも流行しています。

子供と大人を問わず盛んになってきているものにコンピューター・ゲームがあります。ある本を読んでもしたら日本でも1980年代にボーリングがまた人気を取りもどしはじめたと書かれていましたが、アメリカでも同じような傾向が見られています。

YMCA・YWCAのような民間団体では昔からやっていることではあると思いますが、最近の傾向としてボランティアをいろいろな所で使うようになってきています。それは予算のカットも大きく影響していると思います。公共レクリエーションの場合でもボランティアによるところが多いのです。例えば国立公園や国営の森林局には必ずキャンプ地があります。そこにはキャンプ地のホストがいます。新しいボランティアの組織なのですが、このキャンプ地ホストと呼ばれる人達は、常にキャンプ場にて、訪れるキャンパーにキャンプ場の自然の解説をしたり、キャンプ用具の使い方を説明したりしています。

また最近の傾向としては身障者のためのスポーツ・プログラムとか、治療レクリエーション、つまりセラピュティック・レクリエーションが盛んになって来ています。1984年ロス・アンゼルスでのオリンピックの年に、パラ・オリンピックも予定しています。アメリカでは車椅子でバスケット・ボールをする人も増えています。身障者の方々が、他の人々と同じような生活ができるようにということを考えられており、スポーツの機会も多くあるし、仕事の可能性も以前よりずっと増えています。法律でも身障者雇用は義務づけられています。公共施設は身障者が行動しやすいように車椅子のためのスロープやエレベーターが年々増えています。また盲人のための公園などあり、そこには香りの強い草木が沢山植えてあり、草木の名前が全部点字でも書かれています。

今、アメリカでレジャー・カウンセリングでというのが、新しい分野として現われ、大変人々との関心を魅いています。現実にはそれほど実際に使われている場面が少ないようです。レジャー・カウンセリングに関してはいろいろの意見があり、カウンセリング

の専門家でもないのにカウンセリングをするのは全くないという意見と、一方にはレジャーとは余暇とかいう問題は全人格の中で、大変大切な部分だから、それを含めてレジャー・カウンセリングは必要だという考え方もあります。つまりまだ行く道がはっきりしていないというのが現実のような気がします。

皆様が一番関心のあるところだと思うのですが、余暇教育というものも、定義の大変しにくい問題なのでよく話されていますが、いま一つはっきりしないところがあります。実際アメリカでは1918年という昔から学校において余暇教育というものがなされている筈なのですが、まだまだ完全に組織的になされているとはいえません。1+1=2という具合に答えがでてくるものではないので、なんとなくぼやけた部分があるのが現状です。

最近の傾向としてキャンプとか環境教育とかいう場合に一番初めに出てくるのは、やはり定着キャンプです。1カ所に定着してそこでプログラムの展開するという形です。その場合、大体は子供対象のプログラムが多くて1週間から2週間。水泳をしたりハイキングをしたり、テント張りから飯盒炊飯まで野外活動に必要ないろいろな技術を身につけていくのです。その種のキャンプは決して増化しているとはいえません。民間団体でもやはり参加者数を増すようなプログラムをいろいろと考えています。そこで特殊キャンプが増えています。肥満児のためのキャンプとか、コンピューターの腕を上げるキャンプとか、テーマを一つにしぼってやるキャンプが多くなってきています。

アメリカの場合は「シェラ・クラブ」という山岳会とか、「大自然の会」というところが主催しているキャンプなどいろいろありますが大きく分けて三つのところが野外教育に関っているといえましょう。一つは安全教育を大きな柱と考えている学校教育の一環としてのキャンプですがこれをフォーマル・エジュケーションと呼びましょう。もう一つに昔から青少年団体がやっているもので、自然をよりよく理解するということをプログラムの主眼点としてプログラム展開を考えている場合が多いようです。第三には国立公園とか営林署がおこなっている場合で、その自然をより良く利用できるよう、施設など建て、その土地の地理・気候・動植物・歴史などの紹介をおもにする。つまり野外解説の企画です。

環境教育に関しても予算がカットされ、以前のよう

にはできない現状にありますが、指導者の養成だけは大切な分野なので、皆真剣にとりこんでいます。

最後に野外教育、レクリエーション教育に関するカリキュラムにふれてみましょう。カナダとアメリカで4年制大学において、レクリエーションとか公園に関して学位のとれるところが約300校あります。また短期大学（2年制の大学ですが、日本の短大のイメージとは異なり、2年制を終わって4年制の大学に行き、勉強を続けるケースが多い。）でレクリエーションを専攻できる大学が約200校あります。大学院をもっている修士のとれるところは115校、その上博士号までとれる大学は20校あります。1981年、1982年頃の卒業生の数ですが、4年制を卒業するものが1万8千人、修士課程を終えるものが約2千人、そして博士課程に在学している学生が3百人ほどいます。その学生の男女数は以前は男性の方がずっと多かったのですが、最近では半々といっているでしょう。教授陣を見ても半分まではまだいっていませんが、65%は男性教員で35%は女性教員という比率です。

レクリエーションは何学科に属しているかということをお話しましょう。保健・体育・レクリエーション科つまりH P E Rと略して呼ばれている科に属しているケースが一番多く、全体の $\frac{1}{3}$ といわれていますが、最近では減りつつあって、どちらかという教育学の中に入っているケースが増えています。現在でも30%は教育学の中に入っています。また余暇とレクリエーションの関係の中で公園のレインジャーになったり、その他公園に関係する部門の場合は、一般に農学部に入っていることが多いようです。

1960年代、70年代は、レクリエーション関係の学生は増化し続けていましたが、1980年代の調査によると反対に減少している傾向があります。面白いことに、博士号に関しては少しづつですが、増えている傾向にあるようです。2年生の短期大学の場合は確かに減っています。2年間の勉強では、レクリエーション・リーダーの養成は無理だと思われています。

レクリエーションとは幅が広く、分野といってもいろいろありますが、その中で最近増えつつあるのは商業レクリエーションを専攻する学生です。卒業してからの就職を考えた時、最近はこの分野に可能性がでてきたからです。

1977年に新らしく始まったものですが、全米公園レクリエーション協会は、国家的レベルでのレクリエ

ション学科の認可規定を作り認可大学を定めることをはじめました。今はまだ34校が認可大学で、いま26校が申請中です。

治療レクリエーションの場合は特に免許制をとるようにと考えられはじめています。現在は、レクリエーション療法士の資格を持っている方が望ましいという程度ですが、将来は資格証なしではできないということにしていきたいと考えています。